

森
鷗外

か
の
よ
う
に



か
の
よ
う
に

朝小間使の雪が火鉢ひばちに火を入れに来た時、奥さんが不安らしい顔をして、「秀磨ひでまろの部屋にはゆうべも又電気が附いていたね」と云った。

「おや。さようでしたか。先さつき瓦斯ガス煖炉だんろに火を附けにまいりました時は、明りはお消しになって、お床の中で煙草たばこを召し上がっていらっしやいました。」

雪はこの返事をしながら、戸を開けて自分が這入はいった時、大きい葉巻の火が、暗い部屋の、しんとしている中

で、ぼうっと明るくなつては、又微妙かすかになつていた事を思い出して、折々あることではあるが、今朝もはつと思つて、「おや」と口に出そうであつたのを呑み込んだ、その瞬間の事を思い浮べていた。

「そうかい」と云つて、奥さんは雪が火を活いけて、大きい梓火鉢わくの中の、真っ白い灰を綺麗きれいに、盛り上げたようにして置いて、起たつて行くのを、やはり不安な顔をして、見送つていた。邸やしきでは瓦斯が勝手にまで使つてあるのに、奥さんは逆上のぼせると云つて、炭火に当あつていたのである。

電燈は邸やしきではどの寝間にも夜どおし附いている。しかし秀磨は寝る時必ず消して寝る習慣を持っているので、それが附いていれば、又徹夜して本を讀んでいたと云うことが分かる。それで奥さんは手水ちようずに起きる度たびに、廊下から見て、秀磨のいる洋室の窓の隙すきから、火の光の漏れるのを気にしているのである。

秀磨は学習院から文科大学に這入って、歴史科で立派

に卒業した。卒業論文には、国史は自分が畢生ひっせいの事業として研究する積りでいるのだから、苟くも筆いを著つけたくないと云って、古代印度史インドの中から、「迦膩色迦王かにしかおうとぶってんけつじゅう仏典結集」と云う題を選んだ。これは阿輸迦王あそかおうの事はこれまで問題になっていて、この王の事がまだ研究してなかつたからである。しかしこれまで特別にそう云う方面の研究をしていたのでないから、秀磨は一步一步非常な困難に撞どうちやく著して、どうしてもこれはサンスクリットをまるで知らないでは、正確な判断は下されないと考えて、急に高楠博士たかくすはくしの所へ駈かけ附けて、梵語研究ほんごの手ほど

きをして貰った。しかしこう云う学問はなかなか急拵きゆうぐしえに出来る筈はずのものでないから、少しずつ分かって来れば来る程、困難を増すばかりであった。それでも屈せず、選んだ問題だけは、どうにかこうにか解決を附けた。自分ではひどく不満足に思っているが、率直な、一切の修飾しりぞを却けた秀麿の記述は、これまでの卒業論文には余り類がないと云うことであつた。

丁度この卒業論文問題の起つた頃からである。秀麿は別に病氣はないのに、元気がなくなつて、顔色が蒼あおく、目が異様に赫かがやいて、これまでも多く人に交際をしない

男が、一層社交に遠ざかって来た。五条家では、奥さんを始として、ひどく心配して、医者に見せようとしたが、「わたくしは病気なんぞはありません」と云って、どうしても聴かない。奥さんは内証ないしょうで青山博士が来た時尋ねてみた。青山博士は意外な事を問われたと云うような顔をしてこう云った。

「秀磨さんですか。診察しなくちゃ、なんとも云われませんね。ふん。そうですか。病気はないから、医者には見せないと云うのでしたっけ。そうかも知れません。わたくしなんぞは学生を大勢見ているのですが、少し物の

出来る奴が卒業する前後には、皆あんな顔をしていますよ。毎年卒業式の時、側そばで見えていますがお時計を頂戴ちようだいしに出て来る優等生は、大抵秀磨さんのような顔をしていて、卒倒でもしなければ好いと思う位です。も少しで神経衰弱になると云うところで、ならずには済んでいるのです。卒業さえしてしまえば直ります。」

奥さんもなる程そうかと思つて、強しいて心配を押さえ付けて、今に直るだろう、今に直るだろうと、自分で自分に暗示を与えるように努めていた。秀磨が目の前にいない時は、青山博士の言つた事を、一句一句繰り返して

味ってみて、「なる程そうだ、なんの秀磨に病気があるものか、大丈夫だ、今に直る」と思ってみる。そこへ秀磨が蒼い顔をして出て来て、何か上の空うわそらで言つて、跡は黙り込んでしまふ。こつちから何か話し掛けると、実みの入はいつていないような、責せめを塞ふさぐような返事を、詞ことばの調子だけ優しくしてする。なんだか、こつちの詞は、子供が銅像に吹矢を射掛けたように、皮膚から弾はじき戻されてしまふような心持がする。それを見ると、切角青山博士の詞を基礎にして築き上げた楼閣ろうかくが、覚束おぼつかなくぐらついで来るので、奥さんは又心配をし出すのであった。

秀磨は卒業後直ただちに洋行した。秀磨と大した点数の懸隔もなく、優等生として銀時計を頂戴した同科の新学士は、文部省から派遣せられる筈なのに、現にヨオロツパにいる一人が帰らなくては、経費が出ないので、それを待っているうちに、秀磨の方は当主の五条子爵が先へ立たせてしまった。子爵は財政が割合に豊かなので、嫡子ちやくしに外国で学生並の生活をさせる位の事には、さ程困難を

感ぜないからである。

洋行すると云うことになってから、余程元気附いて来た秀磨が、途中からよこした手紙も、ベルリンに著いてからのもの、総すべての周囲の物に興味を持っていて書いたものらしく見えた。印度インドの港で魚うおのように波の底に潜くぐって、銀錢を拾う黒ん坊の子供の事や、ポルトセエドで上陸して見たと云う、ステレオタイプな笑顔の女芸人が種々の樂器を奏する國際的団体の事や、マルセイユで始て西洋の町を散歩して、嘘と云うものを衝つかぬ店で、掛値と云うもののない品物を買って、それを持って帰ろうとして、

紳士がそんな物をぶら下げてお歩きにならなくても、こちらからお宿へ届けると云われ、頼んで置いて帰ってみると、品物が先へ届いていた事や、それからパリイに滞在していて、或る同族の若殿に案内せられてオペラを見に行った時、フオアイエエで立派な貴夫人が来て何か云うと、若殿がつっけんどんに、わたし共はフランス語は話しませんと云つて置いて、自分が呆れた顔をしたのを見て女に聞えたかと思う程大きい声をして、「*Tout ce* ツウ ショ キイ ブリュ ネエ パゾ オル *qui brille, n'est pas or*」と云つたので、始てなる程と悟った事や、それからベルリンに著いた当時の印象を

瑣細ささいな事まで書いてあって、子爵夫婦を面白がらせた。子爵は奥さんに三省堂の世界地図を一枚買って渡して、電報や手紙が来る度に、鉛筆で点を打ったり線を引いたりして、秀磨はここに著いたのだ、ここを通っているのだと言って聞かせた。

ヨオロッパではベルリンに三年いた。その三年目がエリヒ・シュミットもと総長の下に、大学の三百年祭をする年に当たったので、秀磨も鍰つばの嵌はまった松明たいまつを手にとって、松明行列の仲間に入って、ベルリンの町を練って歩いた。大学にいる間、秀磨はこの期にはこれこれの講義を

聴くと云うことを、精くわしく子爵の所へ知らせてよこしたが、その中にはイタリア復興時代だとか、宗教革新の起原だとか云うような、歴史その物の講義と、史的研究の原理と云うような、抽象的な史学の講義とがあるかと思ふと、民族心理学やら神話成立やらがある。プラグマチスムスの哲学史上の地位と云うのがある。或る助教授の受け持っているフリードリヒ・ヘッベルと云う文芸史方面のものがある。ずっと飛び離れて、神学科の寺院史や教義史がある。学期ごとにこんな風で、専門の学問に手を出した事のない子爵には、どんな物だか見当の附かぬ

学科さえあるが、とにかく随分ざつぱく雑駁な学問のしようをして
いるらしいと云う事だけは判断が出来た。しかし子爵
はそれを苦にもしない。息子を大学に入れたり、洋行を
させたりしたのは、何も専門の職業がさせたいからの事
ではない。追って家督相続をさせた後に、恐多いが皇室
の藩屏はんぺいになつて、身分相応な働きをして行くのに、基礎
になる見識があつてくれれば好い。その為ために普通教育
より一段上の教育を受けさせて置こうとした。だから本
人の氣の向く学科を、勝手に選んでさせて置いて好いと
思っているのであつた。

ベルリンにいる間、秀磨が学者の^{うわさ}噂をしてよこした中に、エエリヒ・シュミットの文才や弁説も度々褒^ほめてあつたが、それよりも神学者アドルフ・ハルナツクの事業や勢力がどんなものだと云うことを、繰り返してお父うさんに書いてよこしたのが、どうも特別な意味のある事らしく、帰って顔を見て、土産話^{みやげばなし}にするのが待ち遠いので、手紙でお父うさんに飲み込ませたいとでも云うような熱心が文章の間に見えていた。殊^{こと}に大学の三百年祭の事を知らせてよこした時なんぞは、秀磨はハルナツクをこの目覚ましい祭の中心人物として書いて、ウイルへ

ルム第二世とハルナツクとの君臣の間柄は、人主が学者を信用し、学者が献身的態度を以てもつ学术界に貢献しながら、同時に君国の用をなすと云う方面から見ると、模範的だと云って、ハルナツクが事業の根柢をこんていはつきりさせるために、とうとう父テオドジウスの事にまでさかのぼって、精くわしく新教神学発展の跡をたどって述べていた。自分の専門だと云っている歴史の事に就いても、こんなに力を入れて書いてよこしたことはないのに、どうしてハルナツクの事ばかりを、特別に言ってよこすのだからと子爵は不審に思って、この手紙だけ念を入れて、度々読み返し

て見た。そしてその手紙の要点を掴つかまえようと努力した。手紙の内容を約つづめて見れば、こうである。政治は多数を相手にした為しごと事である。それだから政治をするには、今でも多数を動かしている宗教に重きを置かなくてはならない。ドイツは内治の上では、全く宗教を異ことにしている北と南とを擣つきくるめて、人心の帰嚮きこうを繰あやつって行かなくてはならないし、外交の上でも、いかに勢力を失墜しているとは云え、まだ深い根柢を持っている口オマ法王を計算の外に置くことは出来ない。それだからドイツの政治は、旧教の南ドイツを逆さからわれないように抑おさえていて、

北ドイツの新教の精神で、文化の進歩を謀^はって行かなくてはならない。それには君主が宗教上の、しっかりした基礎を持っていなくてはならない。その基礎が新教神学に置いてある。その新教神学を現に代表している学者はハルナツクである。そう云う意味のある地位に置かれたハルナツクが、少しでも政治の都合の好いように、神学上の意見を曲げているかと云うに、そんな事はしていない。君主もそんな事をさせようとはしていない。そこにドイツの強みがある。それでドイツは世界に羽をのして、息張^いつ^ばっていることが出来る。それで今のような、社会民

政党の跋扈ばっこしている時代になっても、ウイルヘルム第二世は護衛兵も連れずに、侍従武官と自動車に相乗をして、ぷつぶと喇叭らっぱを吹かせてベルリン中を駈け歩いて、出し抜に展覧会を見物しに行ったり、店へ買物をしに行ったりすることが出来るのである。ロシアとでも比べて見ることが好い。グレシヤ正教の寺院を沈滞のままに委まかせて、上辺うわべを真綿にくるむようにして、そつとして置いて、黔首けんしゅを愚ぐにするとでも云いたい政治をしている。その愚にせられた黔首が少しでも目を醒さますと、極端な無政府主義者になる。だからツアアルは平服を著きた警察官が垣を結った

ように立っている間でなくては歩かれないのである。一体宗教を信ずるには神学はいらない。ドイツでも、神学を修めるのは、牧師になる為めで、ちよつと思つと、宗教界に籍を置かないものには神学は不用なように見える。しかし学問なぞをしない、智力の発展していない多数に不用なのである。学問をしたものには、それが有用になつて来る。原来^{がんらい}学問をしたものには、宗教家の謂^いう「信仰」は無い。そう云う人、即^{すなわ}ち教育があつて、信仰のない人に、単に神を尊敬しろ、福音^{ふくいん}を尊敬しろと云つても、それは出来ない。そこで信仰しないと同時に、

宗教の必要をも認めなくなる。そう云う人は危険思想家である。中には実際は危険思想家になっ
ていながら、信仰のないのに信仰のある真似をしたり、宗教の必要を認めないのに、認めている真似をしている。実際この真似をして
いる人は随分多い。そこでドイツの新教神学のよ
うな、教義や寺院の歴史をしつかり調べたものが出来て
いると、教育のあるものは、志さえあれば、専門家の綺
麗に洗い上げた、滓かすのこびり付いていない教義をも覗のぞい
て見ることが出来る。それを覗いて見ると、信仰はしな
いまでも、宗教の必要だけは認めるようになる。そこで

穩健な思想家が出来る。ドイツにはこう云う立脚地を有している人の数がなかなか多い。ドイツの強みが神学に基づいていると云うのは、ここにある。秀磨はこう云う意味で、ハルナツクの人物を称讚しょうさんしている。子爵にも手紙の趣意はおおよそ呑み込めた。

西洋事情や輿地誌略よちしりやくの盛んに行われていた時代に人となつて、翻訳書で当用を弁ずることが出来、華族仲間で口が利かれる程度に、自分を養成しただけの子爵は、精神上の事には、朱子しゆしの註ちゆうに拠よつて論語を講釈するのを聞いたより外、なんの智識もないのだが、頭の好い人な

ので、これを読んだ後に内々自らないない省みて見た。かえり 倅せがれの手
 紙にある宗教と云うのはクリスト教で、神と云うのはク
 リスト教の神である。そんな物は自分とは全く没交渉で
 ある。自分の家には昔から菩提所ぼだいしよに定さだまっている寺があ
 った。それを維新の時、先代が殆ど縁を切ったようにし
 て、家の葬祭を神官に任せてしまった。それからは仏と
 云うものとも、全く没交渉になって、今は祖先の神霊と
 云うものより外、認めていない。現に邸内ていないにも祖先を祭
 った神社だけはあって、鄭重ていちょうな祭をしている。ところ
 が、その祖先の神霊が存在していると、自分は信じてい

るだろうか。祭をする度に、祭るに在いますが如くすと云う論語の句が頭に浮ぶ。しかしそれは祖先が存在していられるように思って、お祭をしなくてはならないと云う意味で、自分を顧みて見るに、實際存在していられると思うのではないらしい。いられるように思うのでもないかも知れない。いられるように思おうと努力するに過ぎない位ではあるまいか。そうして見ると、倅の謂う、信仰がなく、宗教の必要だけを認めると云う人の部類に、自分は這入っているものと見える。いやいや。そうではない。倅の謂うのは、神学でも覗いて見て、これだけの

教義は、信仰しないまでも、必要を認めなくてはならぬと、理性で判断した上で認めることである。自分は神道の書物などを覗いて見たことはない。又自分の覗いて見られるような書物があるか、どうだか、それさえ知らずにいる。そんならと云って、教育のない、信仰のある人が、直覚的に神霊の存在を信じて、その間になんの疑をも挿さしはさまないのとも違うから、自分の祭いをしているのは形式だけで、内容がない。よしや、在いますが如く思おうと努力していても、それは空虚な努力である。いやいや。空虚な努力と云うものはありようがない。そんな事は不

可能である。そうして見ると、教育のない人の信仰が遺伝して、微かすかに残っているだけでも思わなくてはなるまい。しかしこれは倅の考えるように、教育が信仰を破壊すると云うことを認めたと上の話である。果してそうであろうか。どうもそうかも知れない。今の教育を受けて神話と歴史とを一つにして考えていることは出来まい。世界がどうして出来て、どうして発展したか、人類がどうして出来て、どうして発展したかと云うことを、学問に手を出せば、どんな浅い学問の為方しかたをしても、何かの端々はしはしで考えさせられる。そしてその考える事は、神話を事実と

して見させては置かない。神話と歴史とをはつきり考え分けると同時に、先祖その外の^{ほか}神霊の存在は疑問になって来るのである。そうなった前途には恐ろしい危険が横^{よこた}わっているはすまいか。一体世間の人はこんな問題をどう考えているだろう。昔の人が真実だと思っていた、神霊の存在を、今の人が嘘だと思っているのを、世間の人は当り前だとして、平気でいるのではあるまいか。随^{したが}つてあらゆる祭やなんぞが皆内容のない形式になってしまっているのも、同じく当り前だとしているのではあるまいか。又子供に神話を歴史として教えるのも、同じく当

り前だとしているのではあるまいか。そして誰も誰も、
自分は神話と歴史とをはっきり別にして考えていなが
ら、それをわざと擣つき交まぜて子供に教えて、怪まずにい
るのではあるまいか。自分は神霊の存在なんぞは少しも
信仰せずに、唯俗に従したがって聊いささか復か爾またり位の考こで糊塗として
遣やっていて、その風俗、即ち昔神霊の存在を信じた世に
出来て、今神霊の存在を信ぜない世に残っている風俗が、
いつまで現状を維持していようが、いつになったら滅亡
してしまおうが、そんな事には頓とん著ちやくしないのではある
まいか。自分が信ぜない事を、信じているらしく行って、

虚偽だと思つて疚やましがりもせず、それを子供に教えて、子供の心理状態がどうなろうと云うことさえ考えてもみないのであるまいか。倅は信仰はなくても、宗教の必要を認めると云うことを言っている。その必要を認めなくてはならないと云うこと、その必要を認める必要を、世間の人は思つても見ないから、どうしたら神話を歴史だと思わず、神霊の存在を信ぜずに、宗教の必要が現在に於おいて認めていられるか、未来に於いて認めて行かれるかと云うことなんぞを思つて見ようもなく、一切無頓著でいるのではあるまいか。どうも世間の教育を受けた

人の多数は、こんな物ではないかと推察せられる。無論この多数の外に立って、現今の頹勢たいせいを挽回ばんかいしようとしている人はある。そう云う人は、倅の謂う、単に神を信仰しろ、福音を信仰しろと云う類である。又それに雷同している人はある。それは倅の謂う、真似をしている人である。これが頼みになろうか。更に反対の方面を見ると、信仰もなくしてしまい、宗教の必要をも認めなくなってしまうて、それを正直に告白している人のあることも、或る種類の人の言論に徴ちようして知ることが出来る。倅はそう云う人は危険思想家だと云っているが、危険思想家

を嗅かぎ出すことに骨を折っている人も、こっちでは存外
そこまでは気が附いていないらしい。実際こっちでは、
治安妨害とか、風俗壊乱とか云う名目みょうもくの下もとに、そんな
人を羅致らちした実例を見たことがない。しかしこう云うこ
とを洗立あらいだてをして見た所が、確しかとした結果を得ることは
むずかしくはあるまいか。それは人間の力の及ばぬ事では
あるまいか。若もしそうだと、その洗立をするのが、世
間の無頓著よりは危険ではあるまいか。倅もその危険な
事に頭を衝つっ込んでいるのではあるまいか。倅は専門の
学問をしているうちに、ふとそう云う問題に触れて、自

分も不安になったので、己に手紙をよこしたかも知れぬ。それともこの問題にひどく重きを置いていいるのだろうか。

五条子爵は秀麿の手紙を読んでから、自己を反省したり、世間を見渡したりして、ざっとこれだけの事を考えた。しかしそれに就いて倅と往復を重ねた所で、自分の満足するだけの解決が出来そうにもなく、倅の帰って来る時期も近づいているので、それまで待っても好いと思つて、返信は別に宗教問題なんぞに立ち入らずに、只委細承知した、どうぞなるべく穏健な思想を養つて、国家

の用に立つ人物になつて歸つてくれとしか云つて遣らなかつた。そこで秀麿の方でも、お父うさんにどれだけ自分の言つた事が分かつたか知らずにいた。

秀麿は平生丁度その時思っている事を、人に話して見たり、手紙で言つて遣つて見たりするが、それをその人
に是非十分飲み込ませようともせず、人を自説に転ぜさせよう、服させようともしない。それよりは話す間、手紙を書く間に、自分で自分の思想をはつきりさせて見て、そこに満足を感じず。そして自分の思想は、又新しい刺戟しげきを受けて、別な方面へ移つて行く。だからあの時子爵が

精しい返事を遣ったところで、秀磨はもう同じ問題の上で、お父さんの満足するような事を言っではよこさなかつたかも知れない。

洋行をさせる時健康を気遣った秀磨が、旅に出ると元気になつたらしく、筆まめに書いてよこす手紙にも生々した様子が見え、ドイツで秀磨と親しくしたと云つて、帰ってから尋ねて来る同族の人も、秀磨は随分勉強をし

ているが、玉も衝けば氷滑りもすると云う風で、上流こおりすべの人を相手にして開いている、某夫人のパンジオナアトでは、若い男女の寄宿人が、芝居の初興行をでも見に行くととき、ヴィコント五条が一しよでなくては面白くないと云う程だと話して聞せるので、子爵夫婦は喜んで、早く丈夫な男になって帰って来るのを見たいと思つていた。

秀麿は去年の暮に、書物をむやみに沢山持つて、帰つて来た。洋行前にはまだどこやら少年らしい所があったのが、三年の間にすっかり男らしくなつて、血色も好く

なり、肉も少し附いている。しかし待ち構えていた奥さんが気を付けて様子を見ると、どうも物の言振が面白くないように思われた。それは大学を卒業した頃から、西洋へ立つ時までの、何か物を案じていて、好い加減に人に応対していると云うような、沈黙勝な会話振が、定めてすっかり直って帰ったことと思っていたのに、帰った今もやはり立つ前と同じように思われたのである。

新橋へ著いた日の事であった。出迎をした親類や心安い人の中には、邸うちまで附いて来たのもあって、五条家ではそう云う人達に、一寸ちよつとした肴さかなで酒を出した。それが

済んだ跡で、子爵と秀磨との間に、こんな対話があった。

子爵は袴はかまを着けて据わって、刻煙草きざみたばこを煙管きせるで飲んでいたが、瘦やせた顔の目の縁に、皺しわを沢山寄せて、嬉しげに息子をじっと見て、只一言「どうだ」と云った。

「はい」と父の顔を見返しながら秀磨は云ったが、傍そばで見ている奥さんには、その立派な洋服姿が、どうも先つき客の前で勤めていた時と変らないように、少しも寛くつろいだ様子がないように思われて、それが気に掛かった。

子爵は息子がまだ何か云うだろうと思つて、暫しばく黙もくつていたが、それきりなんとも云わないので、詞ことばを続つ

いだ。「書物を沢山持って帰ったそうだね。」

「こつちで為事しごとをするのに差支えないようにと思つて、中には読んで見る方の本でない、物を捜し出す方の本も買って帰ったものですから、嵩かさが大きくなりました。」

「ふん。早く為事に掛かりたかろうなあ。」

秀麿は少し返事に躊躇ちゆうちよするらしく見えた。「それは舟の中でも色々考えてみましたが、どうも当分手が著けられそうもないのです。」こう云つて、何か考えるような顔をしている。

「急ぐ事はない。お前のは売らなくてはならんと云うの

でもなし、学位が欲しいと云うのでもないからな。」一旦いったんこうは云ったが、子爵は更に、「学位は貰っても悪くはないが」と言い足して笑った。

ここまで傍聴していた奥さんが、待ち兼ねたように、いろいろな話をし掛けると、秀磨は優しく受答をしているた。この時奥さんは、どうも秀磨の話は気乗がしていない、つきあい附合に物を言っているようだと云う第一印象を受けたのであった。

それで秀磨が座を立った跡で、奥さんが子爵に言った。「体は大層好くなりましたが、なんだかこう控え目に、

考え考え物を言うようではございませんか。」

「それは大人おとなになったからだ。男と云うものは、奥さんのように口から出任せに物を言っみはてはいけないのだ。」

「まあ。」奥さんは目を睜みはった。四十代が半分過ぎていかるのに、まだぱっちりした、可哀かわいらしい目をしている女である。

「おこつてはいけない。」

「おこりなんかしませんわ。」と云つて、奥さんはちよいと笑つたが、秀麿の返事より、この笑の方が附合あらしかつた。

その時からもう一年近く立っている。久し振の新年も迎えた。秀麿は位階があるので、お父う様程忙しくはないが、幾分か儀式らしい事もしなくてはならない。新調させた礼服を著て、不精らしい顔をせず、それを済ませた。「西洋のお正月はどんなだったえ」とお母あ様が問うと、秀麿は愛想好く笑う。「一向駄目ですな。学生は料理屋へ大晦日おおみそかの晩から行っていまして、ボオレと云

って、シャンパンに葡萄酒ぶどうしゅに砂糖に炭酸水と云うように、いろいろ交ぜて温めて、レモンを輪切にして入れた酒を拵こしらえて夜なかになるのを待っています。そして十二時の時計が鳴り始めると同時に、さあ新年だと云うので、その酒を注ついだ杯さかずきをてんでんに持って、こつこつ打ち付けて、プロジツト・ノイヤアルと大声で呼んで飲むのです。それからふざけながら町を歩いて帰ると、元日は寝ていて、午ひるまで起きはしません。町でも家うちは大抵戸を締めて、ひっそりしています。まあ、クリスマスに祭らしい事はしてしまって、新年の方はお留守になって

いるようなわけですよ」と云う。「でもお上かみのお儀式はあ
るだろうね。」「それはございますそうです。拝賀が午
後二時だとか云うことでした。」「こんな風に、何事につ
けても人が問えば、ヨオロッパの話もするが、自分から
進んで話すことはない。

二三月の一番寒い頃も過ぎた。お母あ様が「向うはこ
んな事ではあるまいね」と尋ねて見た。「それはグラッ
トアイスと云って、寒い盛りに一寸ちよつと温かい晩があつて、
積った雪が上融うわどけをして、それが朝氷あさこっていることがあり
ます。木の枝は硝子ガラスで包んだようになってあります。ベル

リンのウンテル・デン・リンデンと云う大通りの人道が、少し凸凹でこぼこのある鏡のようになっていて、滑って歩くことが出来ないので、人足が沙すなを入れた籠かごを腋わきに抱えて、蒔まいて歩いていきます。そう云う時が一番寒いのですが、それでもロシアのように、町を歩いていて鼻が腐るような事はありません。煖炉のない家もないし、毛皮を著ない人もない位ですから、寒さが体には徹こたえません。こちらでは夏座敷に住んで、夏の支度をして、寒がっているようなものですね。」秀磨はこんな話をした。

桜の咲く春も過ぎた。お母あ様に桜の事を問われて、

秀磨は云った。「ドイツのような寒い国では、春が一どきに来て、どの花も一しよに咲きます。美しい五月と云う詞があります。桜の花もないことはありませんが、あちの人は桜と云う木は桜ん坊のなる木だとばかり思っていますから、花見はいたしません。ベルリンから半道はんみちばかりの、ストララウと云う村に、スプレエ川の岸で、桜の沢山植えてある所があります。そこへ日本から行っている学生が揃そろって、花見に行つたことがありましたよ。

絨緞じゅうたんを織る工場の女工なんぞが通り掛かつて、あの人達は木の下で何をしているのだらうと云って、驚いて見

ていました。」

暑い夏も過ぎた。秀麿はお母あ様に、「ベルリンではこんな日にどうしているの」と問われて、暫く頭を傾けていたが、とうとう笑いながら、こう云った。「一番つまらない季節ですね。誰も彼も旅行してしまいます。若い娘なんぞがスウィッツルに行つて、高い山に登ります。跡に残っている人はしかた為方がないので、公園内の飲食店で催す演奏会へでも往いつて、夜なかまで涼みます。だいぶ北極が近くなっている国ですから、そんなにして遊んで帰つて、夜なかを過ぎて寝ようとする、もう窓が明る

くなり掛かっています。」

かれこれするうちに秋になった。「ヨオロッパでは寒

あきびより

さが早く来ますから、こんな秋日和の味は味うことが出来ませんね」と、秀麿は云って、お母あ様に対して、ち

よつと愉快げな笑顔をして見せる。大抵こんな話をする

のは食事の時位で、その外の時間には、秀麿は自分の居間になっている洋室に籠こもっている。西洋から持って来た

書物が多いので、本箱なんぞでは間に合わなくなつて、

この一間だけ壁にこしこし悉こしこしく棚たなを取り付けさせて、それへ一

ぱい書物を詰め込んだ。棚の前には薄い緑色の幕を引か

せたので、一種の装飾にはなつたが、壁がこれまでの倍以上の厚さになつたと同じわけだから、室内が余程暗く
なつて、それと同時に、一間が外より物音の聞えない、
しんとした所になつてしまつた。小春の空が快く晴れて、
誰も彼も出歩く頃になつても、秀磨はこのしんとした所
に籠つて、テエブル卓ななめの傍を離れずに本を読んでいる。窓の明
りが左手から斜ななめに差し込んで、緑の羅紗らしやの張つてある
上を半分明るくしている卓である。

この秋は暖い暖いと云っているうちに、稀まれに降る雨がいつか時雨しぐれめいて来て、もう二三日前から、秀磨の部屋のフウベン形の瓦斯ガス煖炉だんろにも、小間使の雪が来て点火することになっている。

朝起きて、庭の方へ築つき出してある小さいヴェランダへ出て見ると、庭には一面に、大きい黄いろい梧桐ごとうの葉と、小さい赤い山もみじの葉とが散らばって、ヴェランダから庭へ降りる石段の上まで、殆ど隙間いろどもなく彩いろどっている。石垣に沿うて、露ぬに濡れた、老緑ろうりよくの広葉を茂

らせている八角全盛が、所々に白い茎を、枝のある燭台しよくだいのように抽き出して、白い花を咲かせている上に、薄曇うすぐもの空から日光が少し漏れて、雀すずめが二三羽鳴きながら飛び交わしている。

秀磨は暫く眺めていて、両手を力なく垂れたまままで、背を反らせて伸びをして、深い息を衝いた。それから部屋に這入って、洗面卓の傍へ行つて、雪が取って置いた湯を使つて、背広の服を引掛けた。洋行して帰つてからは、いつも洋服を著ているのである。

そこへお母あ様が這入つて来た。「きようは日曜だか

ら、お父う様は少しゆっくりしていらっしやるのだが、わたしはもう御飯を戴いただくから、お前もおいででないか。」
こう云つて、息子の顔を横から覗のぞくように見て、詞を続けた。「ゆうべも大層遅くまで起きていましたね。いつも同じ事を言うようですが、西洋から帰つてお出いでの時は、あんなに体が好かったのに、余り勉強ばかりして、段々顔色を悪くしておしまいなだね。」

「なに。体はどうもありません。外へ出ないでいるから、日に焼けないのでしよう。」笑いながら云つて、しよに洋室を出た。

しかし奥さんにはその笑声が胸を刺すように感ぜられた。秀磨が心からでなく、人に目潰めつぶしに何か投げ附けるように笑声をあびせ掛ける習癖を、自分も意識せず、いつの間にか養成しているのを、奥さんは本能的に知っているのである。

食事をしまつて帰った時は、明方に薄曇のしていた空がすっかり晴れて、日光が色々に邪魔をする物のある秀磨の室へやを、物見高い心から、依怙えこじ地に覗こうとするように、窓帷まどかけのへりや書棚のふちを彩つて、卓テエブルの上に幅の広い、明るい帯をなして、インク壺つぼを光らせたり、床に

敷いてある絨氈じゅうたんの空想的な花模様せつなに、刹那の性命を与えたりしている。そんな風に、日光の差し込んでいる処ところの空気は、黄いろに染まり掛かった青葉のような色をして、その中には細かい塵ちりが躍っている。

室内の温度の余り高いのを喜ばない秀磨は、煖炉のコックを三分一程閉じて、葉巻を銜くわえて、運動椅子に身を投げ掛けた。

秀磨の心理状態を簡単に説明すれば、無聊ぶりように苦んでいると云うより外はない。それも何事もすることの出来ない、低い刺戟に饑うえている人の感ずる退屈とは違ふ。内

に眠っている事業に圧迫せられるような心持である。潜在力の苦痛である。三国時代の英雄は髀ひに肉を生じたのを見て歎たんじた。それと同じように、余よ所そ目めには痩せて血色の悪い秀麿が、自己の力を知覚していて、脳髓が医者いの謂いう無動作性萎縮いしゆくに陥いらねば好いがと憂えている。そして思量の体操をする積りで、哲学の本なんぞを読み耽ふけっているのである。お母あ様程には、秀麿の健康状態に就いて悲観していかない父の子爵が、いつだったか食事の時息子を顧みて、「一肚皮時宜いちとひじぎに合わずかな」と云つて、意味ありげに笑った。秀麿は例の笑を顔に湛たたえて、

「僕は不平家ではありません」と答えた。どうもお父う様はこっちが極端な自由思想をでも持っていはしないかと疑っているらしい。それは誤解である。しかしさすが男親だけにお母あ様よりは、切実に少くもこっちの心理状態の一面を解していてくれるようだと、秀磨は思った。

秀磨は父の詞ことばを一つ思い出したのが機縁になって、今一つの父の詞を思い出した。それは又或る日食事をしている時の事で「どうも人間が猿から出来たなんぞと思っっていられては困るからな」と云った。秀磨はぎくりとした。秀磨だって、ヘツケルのアントロポゲニイに連署

して、それを自分の告白にしても好いとは思っていない。しかしお父う様のこの詞の奥には、こっちの思想と相容あいいれない何物かが潜んでいるらしい。まさかお父う様だつて、草昧そうまいの世に一国民の造つた神話を、そのまま歴史だと信じてはいられまいが、うかと神話が歴史でないと云うことを言明しては、人生の重大な物の一角が崩れ始めて、船底の穴から水の這入るように物質的思想が這入つて来て、船を沈没させずには置かないと思つていられるのではあるまいか。そう思つて知らず識らず、頑冥がんめいな人物や、仮面を被かむつた思想家と同じ穴に陥いつていられる

のではあるまいかと、秀麿は思った。

こう思うので、秀麿は父の誤解を打ち破ろうとして進むことを躊躇している。秀麿が為めには、神話が歴史でないと言ふことを言明することは、良心の命ずるところである。それを言明しても、果物が堅実な核さねを蔵して、るように、神話の包んでいる人生の重要な物は、保護して行かれると思っている。彼を承認して置いて、此これを維持して行くのが、学者の務つとめだと言ふばかりではなく、人間の務だと思っている。

そこで秀麿は父と自分との間に、狭くて深い谷がある

ように感ずる。それと同時に、父が自分と話をする時、危険な物の這入っている疑のある箱の蓋を、そつと開けて見ようとしては、その手を又引つ込めてしまふような態度に出るのを見て、齒痒はがゆいようにも思い、又氣の毒だから、いたわって、手を出させずに置かなくてはならないようにも思う。父が箱の蓋を取って見て、白昼おそに鬼を見て、毒でもなんでもない物を毒だと思つて怖れるよりは、箱の内容を疑わせて置くのが、まだしもの事かと思う。

秀磨のこう思うのも無理は無い。明敏な父の子爵は秀

磨がハルナツクの事を書いた手紙を見て、それに対する
 返信を控えて置いた後に、寝られぬ夜よなどには度々宗教
 問題を頭の中で繰り返して見た。そして思えば思う程、
 この問題は手の付けられぬものだと言ふ意見に傾いて、
 随したがってそれに手を著けるのを危険だとみるようになって
 た。そこでとにかくせがれ倅せがれにそんな問題に深入をさせたく
 ない。なろう事なら、倅の思想が他の方面に向くように
 したい。そう思うので、自分からは宗教問題の事などは
 決して言い出さない。そしてこの問題が倅の頭にどれだ
 けの根を卸しているかとあやぶんで、窃ひそかに様子うかがを覗うかがう

ようにしているのである。

秀磨と父との対話が、ヨオロッパから帰って、もう一年にもなるのに、とかく対陣している両軍が、双方から斥候せっこうを出して、その斥候が敵の影を認める度に、遠方から射撃して還かえるように、はかばかしい衝突もせぬ代りに、平和に打ち明けることもなくしているのは、こう云うわけである。

秀磨の銜くわえている葉巻の白い灰が、だいぶ長くなつて持っていたのが、とうとう折れて、運動椅子に倚より掛かっている秀磨のチョッキの上に、細い鱗うろこのような破片

を留^とめて、絨^{じゅう}緞^{たん}の上に落ちて砕けた。今のようになんもせずにいると、秀麿はいつも内には事業の圧迫と云うような物を受け、外には家庭の空気の或る緊張を覚えて、不快である。

秀麿は「又本を読むかな」と思った。兼ねて生涯の事業にしようと企てた本国の歴史を書くことは、どうも神話と歴史との限界をはっきりさせずには手が著けられない。寧^{むし}ろ先^まず神話の結成を学問上に綺麗に洗い上げて、それに伴う信仰を、教義史体にはっきり書き、その信仰を司祭的に取り扱った機関を寺院史体にはっきり書く方

が好さそうだ。そうしたってプロテスタント教がその教義史と寺院史とで毀損きそんせられないと同じ事で、祖先崇拜の教義や機関も、特にそのために危害を受ける筈はずはない。これだけの事を完成するのは、極きわめて容易だと思つと、もうその平明な、小ざっぱりした記載を目の前に見るよ
うな気がする。それが済んだら、安心して歴史に取り掛
られるだろう。しかしそれを敢あえてする事、その目に見え
ている物を手に取る事を、どうしても周囲の事情が許し
そうにないと云う認識は、ベルリンでそろそろ故郷へ歸
る支度に手を著け始めた頃から、段段に、或る液体の中

に浮んだ一点の塵ちりを中心にして、結晶が出来て、それが大きくなるように、秀麿の意識の上に形づくられた。これが秀麿の脳髓の中に蟠結はんけつしている暗黒な塊で、秀麿の企てている事業は、この塊に礙さまたげられて、どうしても発展させるわけにいかないのである。それで秀麿は製作的方面の脈管を総て塞ふさいで、思量の体操として本だけ読んでいる。本を読み出すと、秀麿は不思議に精神をそこに集注することが出来て、事業の圧迫をも感ぜず、家庭の空気の緊張をも感ぜないでいる。それで本ばかり読んでいることになるのである。

「又本を読むかな」と秀麿は思った。そして運動椅子から身を起した。

丁度その時こつこつと戸を叩いて、秀麿の返事をするのを待って、雪が這入って来た。小さい顔に、くりくりした、漆のように黒い目を光らして、小さくて鋭く高い鼻が少し仰向あおむしているのが、ひどく可哀らしい。秀麿が帰った当座、雪はまだ西洋室で用をしたことがなかった。ので、開けた戸を、内からしやがんで締めて、絨緞の上に手を衝いて物を言った。秀麿は驚いて、笑顔をして西洋室での行儀を教えて遣った。なんでも一度言っただけ聞かせ

ると、しっかり覚えて、その次の度たびからは慣れたもののようにするのである。

暖炉を背にして立って、戸口を這入った雪を見た秀磨の顔は晴やかになった。エロチックの方面の生活のまるで瞑ねむっている秀磨が、平和ではあっても陰気なこの家で、心から爽快そうかいを覚えるのは、この小さい小間使を見る時はかりだと云っても好い位である。

「綾小路あやこうじさんがいらっしやいました」と、雪は籠かごの中の小鳥が人を見るように、くりくりした目の瞳ひとみを秀磨の顔に向けて云った。雪は若檀わかだんな那樣に物を言う機会が生ず

る度に、胸の中で凱歌がいかの声が始る程、無意味に、何の欲望もなく、秀磨を崇拜しているのである。

この時雪の締めて置いた戸を、廊下の方からあらあらしく開けて、茶の天鷲びろうど絨の服を着た、秀磨と同年位の男が、駆け込むように這入って来て、いきなり雪の肩を、太った赤い手で押えた。「おい、雪。若檀那の顔ばかり見ている、取次をするのを忘れては困るじゃないか。」雪の顔は真っ赤になった。そして逃げるように、黙って部屋を出て行った。綾小路の方は振り返ってもみながったのである。

秀磨の眉間みけんには、注意して見なくては見えない程の皺しわが寄つたが、それが又注意して見ても見えない程早く消えて、顔の表情は極真面目ごくまじめになつてゐる。「君つまらない笑じょうだん談へきとうは、僕の所でだけはよしてくれ給え。」

「劈頭へきとう第一に小言を食わせるなんぞは驚いたね。気持の好い天気だぜ。君の内の親玉なんぞは、秋晴しゅうせいとかなんとか云うのだらう。尤もっともセゾンはもう冬かも知れないが、過渡時代には、冬の日になつたり、秋の日になつたりするのだ。きようはまだ秋だとして置くね。どこか底の方に、ぴりつとした冬の分子が潜んでいて、夕日が沈

み掛かって、かつと照るような、悲哀を帯びて爽快な処がある。まあ、年増としまの美人のようなものだね。こんな日にもぐらもち鼯鼠もぐらもちのようになって、内に引っ込んで、本を読んでいるのは、世界は広いが、先ず君位なものだろう。それでも机の上に俯ふさっていないな。ただけを、僕は褒ほめて置かね。」

秀磨は真面目ではあるが、厭いやがりもしないらしい顔をして、盛んに饒舌しゃべり立てている綾小路の様子を見ている。簡単に言えば、この男には餓鬼がき大将と云う表情がある。額ひたいぎわ際ぎわから顛頂ちんちようへ掛けて、少し長めに刈った髪を真っ直

に背後うしろへ向けて搔き上げたのが、日本画にかく野猪いのししの毛のようめじりに逆立っている。細い目のちよいと下がった目尻めじりに、嘲笑ちようしやう的な微笑を湛えて、幅広く広げた口を囲むように、左右の頬に大きい括弧かっこに似た、深い皺を寄せている。

綾小路はまだ饒舌る。「そんなに僕の顔ばかり見給うな。心中大いに僕を軽侮しているのだらう。好いじゃないか。君がロアで、僕がブツフォンか。ドイツ語でホオフナルと云うのだ。陛下の倡優しょうゆうを以て遇する所か。」

秀磨は覚えす噴き出した。「僕がそんな侮辱的な考を

するものか。」

「そんなら頭からけんつくなんぞを食わせないが好い。」
「うん。僕が悪かった。」秀麿は葉巻の箱の蓋を開けて
勧めながら、ひとりごと独語のようにつぶやいた。「僕は人の空
想に毒を注ぎ込むように感じるものだから。」

「それがサンチマンタルなのだよ」と云いながら、綾小路は葉巻を取った。秀麿はマツチを摩すった。

「メルシイ」と云って綾小路が吸い附けた。

「暖かい所が好かろう」と云って、秀麿は椅子を一つ煖
炉の前に押し遣った。

綾小路は椅背きはいに手を掛けたが、すぐに据わらずに、あたりを見廻して、卓テエブルの上にゆうべから開けたままになっている、厚い、仮綴かりとじの洋書に目を着けた。傍かたわらには幅の広い籠へらのような形をした、鼈甲べっこうの紙切小刀かみきりこがたなが置いてある。「又何か大きな物にかじり附いているね。」こう云って秀磨の顔を見ながら、腰を卸した。

綾小路は学習院を秀磨と同期で通過した男である。秀

磨は大学に行くのに、綾小路は画かきになると云って、溜池ためいけの洋画研究所へ通い始めた。それから秀磨がまだ文科にいるうちに、綾小路は先へ洋行して、パリイにいた。秀磨がマルセイユから上陸して、ベルリンへ行く途中で、二三日パリイに滞在していた時には、親切に世話を焼いて、シャン・ゼリゼエの散歩やら、テアアトル・フランセエとジムナアズ・ドラマチックとの芝居見物やら、時間おしを吝おしまずに案内をして歩いて、ベルリンへ行つてから著きる服まで誂あつらえさせてくれた。

綾小路は目と耳とばかりで生活しているような男で、

芸術をさえ余り真面目には取り扱っていないが、明敏な頭脳がいつも何物にか饑えている。それで故郷へ帰って以来引き籠り勝にしている秀磨の方からは、尋ねても行かぬのに、折々遊びに来て、秀磨の読んでいる本の話、口ではちやかしながら、真面目に聞いて考えても見るのである。

綾小路は卓の所へ歩いて行って、開けてある本の表紙を引っ繰り返して見た。「ジイ・ファイロゾフイイ・デス・アルス・オツプか。妙な標題だなあ。」

そこへ雪が楕円形だえんけいのニツケル盆こうちやに香茶の道具を載せて

持つて来た。そして小さい卓を煖炉の前へ運んで、その上に盆を置いて、綾小路の方を見ぬようにしてちよいと見て、そつと部屋を出て行った。何か言われはしないだろうか。言えは又恥かしいような事を言うだろう。どんな事を言うだろう。言わせて聞いても見たいと云うような心持で雪はいたが、こん度は綾小路が黙っていた。

秀麿は伏せてあるタツスを起して茶を注いだ。そして「牛乳を入れるのだろうか」と云つて、綾小路を顧み

た。「こないだのように沢山入れないでくれ給え。一体アル

ス・オツプとはなんだい。「こう云いながら、綾小路は
暖炉の前の椅子に掛けた。

「コム・シイさ。かのようにとでも云ったら好いのだろ
う。妙な所を押さえて、考を押し広めて行ったものだが、
不思議に僕の立場そのままを説明してくれるようで、愉
快でたまらないから、とうとうゆうべは三時まで読んで
いた。」

「三時まで。」綾小路は目を睜みはった。「どうして、どこ
が君の立場そのままなのだ。」

「そう」と云って、秀麿は暫く考えていた。千ペエジ近

い本を六七分通り読んだのだから、どんな風に要点を撮つまんで話したものと考えたのである。「先ず本当だと云う詞ことばからして考えて掛かからなくてはならないね。裁判所で証拠立てをして拵しらえた判決文を事実だと云って、それを本当だとするのが、普通の意味の本当だろう。ところが、そう云う意味の事実と云うものは存在しない。事実だと云っても、人間の写象を通過した以上は、物質論者のランゲの謂いう湊合そうごうが加わっている。意識せずに詩にしている。嘘うそになっている。そこで今一つの意味の本当と云うものを立てなくてはならなくなる。小説は事実

を本当とする意味に於おいては嘘だ。しかしこれは最初から事実がらなないで、嘘と意識して作って、通用させている。そしてその中うちに性命がある。価値がある。尊い神話も同じように出来て、通用して来たのだが、あれは最初事実がただけ違う。君のかく画も、どれ程写生したところ、実物ではない。嘘の積りでかいている。人生の性命あり、価値あるものは、皆この意識した嘘だ。第二の意味の本当はこれより外には求められない。こう云う風に本当を二つに見ることは、カントが元祖で、近頃プラグマチスムなんぞで、余程卑俗にして繰り返している

のも同じ事だ。これだけの事は一寸ちよつと云つて置かなくては、話が出来ないのだがね。」

「宜よろしい。詞はどうでも好い。その位な事は僕にも分かっている。僕のかく画だつて、実物ではないが、今年も展覧会で一枚売れたから、慥たしかに多少の価値がある。だから僕の画を本当だとするには、異議はない。そこでコム・シイはどうなるのだ。」

「まあ待ち給え。そこで人間のあらゆる智識、あらゆる学問の根本を調べてみるのだね。一番正確だとしてある数学方面で、点だの線だのと云うものがある。どんなに

細かくぼつんと打ったって点にはならない。どんなに細くすうつと引いたって線にはならない。どんなに好く削った板の縁ふちも線にはなっていない。角かども点にはなっていない。点と線は存在しない。例の意識した嘘だ。しかし点と線があるかのように考えなくては、幾何学は成り立たない。あるかのようにだね。コム・シイだね。自然科学はどうだ。物質と云うものでからが存在はしない。物質が元子から組み立てられていると云う。その元子も存在はしない。しかし物質があつて、元子から組み立ててあるかのように考えなくては、元子量の勘定が出来ない

から、化学は成り立たない。精神学の方面はどうだ。自由だの、靈魂不滅だの、義務だのは存在しない。その無いものを有るかのように考えなくては、倫理は成り立たない。理想と云っているものはそれだ。法律の自由意志と云うものの存在しないのも、疾とづくに分かっている。しかし自由意志があるかのように考えなくては、刑法が全部無意味になる。どんな哲学者も、近世になつては大抵世界を相待そつたいに見て、絶待ぜつたいの存在しないことを認めてはいるが、それでも絶待があるかのように考えている。宗教でも、もうだいたい古くシユライエルマツヘルが神を父

であるかのようになると云っている。孔子こうしもずっと古く祭るに在いますが如くすと云っている。先祖の霊があるかのように祭るのだ。そうして見ると、人間の智識、学問はさて置き、宗教でもなんでも、その根本を調べて見ると、事実として証拠立てられない或る物を建こんりゆう立している。即ちかのようにが土台に横よこたわっているのだね。」

「まあ一寸待ってくれ給え。君は僕の事を饒舌しゃべる饒舌ると云うが、君が饒舌り出して来ると、駆足になるから、附いて行かれない。その、かのようにと云う怪物の正体も、少し見え掛っては来たが、まあ、茶でももう一杯飲

んで考えて見なくては、はつきりしないね。」

「もうぬるくなつただらう。」

「なに。好いよ。雪と云う、証拠立てられる事実が間へ這はい入はいつて来ると、考えがこんがらかつて来るからね。そうすると、つまり事実と事実がごろごろ転がっていてもしようがない。それを結び附けて考えようとする、厭いやでも或る物を土台にしなくてはならない。その土台が例のかのようにだと云うのだね。宜しい。ところが、僕はそんな怪物の事は考えずに置く。考えても言わずに置く。綾小路は生なまぬる温ぬるい香茶をぐつと飲んで、決然と言ひ

放った。

秀磨は顔を蹙めた。^{しか}「それは僕も言わずにいる。しかし君は画だけかいて、言わずにいられようが、僕は言うために学問をしたのだ。考えずには無論いられない。考えてそれを真直ぐに言わずにいるには、黙ってしまうか、別に嘘を拵^{こしら}えて言わなくてはならない。それでは僕の立場がなくなってしまうのだ。」

「しかしね、君、その君が言うために学問したと云うのは、歴史を書くことだろう。僕が画をかくように、怪物が土台になっただけでも好いから、構わずにずんずん書け

ば好いじゃないか。」

「そうはいかないよ。書き始めるには、どうしても神話を別にしなくてはならないのだ。別にすると、なぜ別にする、なぜごちやごちやにして置かないかと云う疑問が起る。どうしても歴史は、画のように一刹那を捉とらえて遣っているわけにはいかないのだ。」

「それでは僕のかく画には怪物が隠れているから好い。君の書く歴史には怪物が現れて来るからいけないと云うのだね。」

「まあ、そうだ。」

「意気地がないねえ。現れたら、どうなるのだ。」

「危険思想だと云われる。それも世間がかれこれ云うだけなら、奮闘もしよう。第一父が承知しないだろうと思うのだ。」

「いよいよ意気地がないねえ。そんな葛藤かっとうなら、僕はもう疾とづくに解決してしまっている。僕は画えかきになる時、親爺おやじが見限ってしまったて、現に高等遊民として取扱っているのだ。君は歴史家になると云うのをお父うさんが喜んで承知した。そこで大学も卒業した。洋行も僕のように無理をしないで、気楽にした。君は今まで葛藤くりのべの

をしていたのだ。僕の五六年前に解決した事を、君は今解決して、好きなように歴史を書くが好いじゃないか。已やむを得んじやないか。」

「しかし僕はそんな葛藤を起さずに遣つていかれる筈だと思つている。平和な解決がつい目の前に見えていゝ。手に取られるように見えている。それを下手へたに手に取るうとして失敗をすることなんぞは、避けたいと思つていゝ。それでぐずぐずして、君にまで意気地がないと云われるのだ。」秀磨は溜息ためいきを衝いた。

「ふん、どうしてお父うさんを納得させようと云うのだ。」

「僕が思想が危険思想でもなんでもないと云うことを言
って聞せさえすれば好いのだが。」

「どう言って聞せるね。僕がお父うさんだと思つて、そ
こで一つ言つて見給え。」

「困るなあ」と云つて、秀磨は立つて、室内をあちこち
歩き出した。

倅ひかげはもうヴェランダの檐のきを越して、屋根の上に移つ
てしまった。真まつ蒼さおに澄み切つた、まだ秋らしい空の色
がヴェランダの硝子戸を青玉せいぎよくのように染めたのが、窓
越しに少し翳かすんで見えている。山の手の日曜日にの寂しさ

が、だいぶ広いこの邸やしきの庭に、田舎の別荘めいた感じを与える。突然自動車が一台煉瓦塀れんがべいの外をけたたましく過ぎて、跡は又元の寂しさに戻った。

秀磨は語を続ついだ。「まあ、こうだ。君がさつきから怪物怪物と云っている、その、かのようにだがね。あれは決して怪物ではない。かのようにがなくては、学問もなければ、芸術もない、宗教もない。人生のあらゆる価値のあるものは、かのようにを中心ちゆうしんにしている。昔の人が人格のある単数の神や、複数の神の存在を信じて、その前に頭を屈かがめたように、僕はかのようにの前に敬虔けいけんに

頭を屈める。その尊敬の情は熱烈ではないが、澄み切った、純潔な感情なのだ。道徳だってそうだ。義務が事実として証拠立てられるものでないと云うことだけ分かって、怪物扱い、幽霊扱いにするイブセンの芝居なんぞを見る度に、僕は憤懣ふんまんに堪えない。破壊は免るべからざる破壊かも知れない。しかしその跡には果してなんにもないのか。手に取られない、微かすかなような外観のものではないが、底にはかのようにが儼げんこ乎として存立している。人間は飽くまでも義務があるかのように行わなくてはならない。僕はそう行って行く積りだ。人間が猿から出来

たと云うのは、あれは事実問題で、事実として証明しようとは掛かっているのだから、ヒポテジスであつて、かのようにではないが、進化の根本思想はやはりかのようにだ。生類は進化するかのようにしか考えられない。僕は人間の前途に光明を見て進んで行く。祖先の霊があるかのように背後うしろを顧みて、祖先崇拜をして、義務があるかのように、徳義の道を踏んで、前途に光明を見て進んで行く。そうして見れば、僕は事実上極蒙昧ごくもうまいな、極従順な、山の中の百姓と、なんの扱えらぶ所もない。只頭がぼんやりしていないだけだ。極頑固な、極篤実な、敬神家や道学

先生と、なんの択ぶところもない。只頭がごつごつして
いないだけだ。ねえ、君、この位安全な、危険でない思
想はないじゃないか。神が事実でない。義務が事実でな
い。これはどうしても今日になって認めずにはいられな
いが、それを認めたのを手柄にして、神を流す^{けが}。義務を
蹂躪^{じゅうりん}する。そこに危険は始て生じる。行為は勿論、思
想まで、そう云う危険な事は十分撲滅しようとするが好
い。しかしそんな奴の出て来たのを見て、天国を信ずる
昔に戻そう、地球が動かずにいて、太陽が巡回している
と思う昔に戻そうとしたって、それは不可能だ。そうす

るには大学も何も潰つぶしてしまつて、世間をくら闇にしな
くてはならない。黔首けんしゅを愚ぐにしなくてはならない。それ
は不可能だ。どうしても、かのようにを尊敬する、僕の
立場より外に、立場はない。」

これまで例の口の端はたの括弧かっこを二重三重ふたえみえにして、妙な微
笑を顔に湛たたえて、葉巻の烟けむりを吹きながら聞いていた綾
小路は、煙草の灰を灰皿に叩き落して、身を起しながら、
「駄目だ」と、簡単に一言云つて、暖炉を背にして立つ
た。そしてめまぐるしく歩き廻りながら饒舌じょうぜつつている秀
磨を、冷やかに見ている。

秀磨は綾小路の正面に立ち止まって相手の顔を見詰めた。蒼い顔の目の縁がぽつと赤くなつて、その目の奥にはフアナチスムの火に似た、一種の光がある。「なぜなぜ駄目だ。」

「なぜって知れているじゃないか。人に君のような考になれと云つたつて、誰がなるものか。百姓はシの字を書いた三角の物を額へ当てて、先祖の幽霊が盆にのこのこ歩いて来ると思っている。道学先生は義務の発電所のようなものが、天の上かどこかにあつて、自分の教おすわつた師匠がその電気を取り続いで、自分に掛けてくれて、そ

のお蔭かげで自分が生涯てごたえびりびりと動いているように思っている。みんな手応てごたえのあるものを向うに見ているから、崇拜じゆんぽうも出来れば、遵奉じゆんぽうも出来るのだ。人に僕のかいた裸体画を一枚遣つて、女房を持たずにいろ、けしからん所へ往いかずにいろ、これを生きた女であるかのように思えと云つたつて、聴くものか。君のかのようにはそれだ。」

「そんなら君はどうしている。幽霊がのこのこ歩いて来ると思ふのか。電気を掛けられていると思ふのか。」

「そんな事はない。」

「そんならどう思う。」

「どうも思わずにいる。」

「思わずにいられるか。」

「そうさね。まるで思わない事もない。しかしなるだけ思わないようにしている。極きめずに置く。画をかくには極めなくても好いからね。」

「そんなら君が仮に僕の地位に立って、歴史を書かなくてはならないとなったら、どうする。」

「僕は歴史を書かなくてはならないような地位には立たない。御免を蒙る。」綾小路の顔からは微笑の影がいつか消えて、平気な、殆ほとんど不愛想な表情になっている。

秀磨は気拔けがしたように、両手を力なく垂れて、こ
ん度は自分が寂しく微笑ほほえんだ。「そうだね。てんでに自
分の職業を遣って、そんな問題はそつとして置くのだろ
う。僕は職業の選びようが悪かった。ぼんやりして遣つ
たり、嘘を衝ついてやれば造做ぞうさはないが、正直に、真面目
に遣ろうとすると、八方塞ふさがりになる職業を、僕は不幸
にして選んだのだ。」

綾小路の目は一刹那せつな鋼鉄の様に光った。「八方塞がり
になったら、突貫して行く積りで、なぜ遣らない。」
秀磨は又目の縁を赤くした。そして殆ど大人の前に出

た子供のよこうな口吻こうぶんで、声低く云った。「所詮しよせん父と妥協して遣る望はあるまいかね。」

「駄目、駄目」と綾小路は云った。

綾小路は背をあぶるように、煖炉に太った体を近づけて、両手を腰のうしろに廻して、少し前屈みになって立ち、秀麿はその二三歩前に、瘦せた、しなやかな体を、まだこれから延びようとする今年竹ことしだけのように、真っ直にして立ち、二人は目と目を見合わせて、良久ややしく黙っている。山の手の日曜日の寂しさが、二人の周囲を依然支配している。

日本文学電子図書館

阿部一族・舞姫

著 者：森 鷗外

作成者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社



日本文学電子図書館